

昭和三十九年十一月十四日 講演

「激動期における青年に寄せる期待」

参議院議長 郡 祐一先生

今御紹介くださった知久寮長は、中学校に入
学した時からの友だちです。知久さんがいわれ
ましたように、私は大学卒業まで大分ひまがか
かっておる。決して秀才ではない。しかし面白
いもので、学校であまりできなかったというこ
とはあんがい選挙をやるるときなどに邪魔には
なりません。「おれは大学のとき一番だ」「二番
だ」という人間は少なく、「おれはいつも中
から下の方にいた」という程度の人の方が世
間には多いから、秀才でない方が共鳴されやす
い。しかし成績は勿論いいにこしたことはない。
ただ学生時代で息の切れてしまうような人間
にはなつてもらいたくないのであります。

激動期における青年に寄せる期待という意
味の演題を掲げましたが、今いったい激動期に
いるのか、太平な時代にいるのかどちらだろう
かと考えてみましょう。諸君が生まれた時代は
たしかに日本の最高の激動期であった。諸君の
親は、諸君に生きてゆくための食物を与える自
信がなかったでしょう。当時の子供さんに、私
の子供がそうでしたが、戦後はじめて角砂糖を

みせたとき食べ方がわからなかった。食べ方の
わからないものだらけでした。子供だけではな
い。戦争が終わって日本に捕えられている捕虜
に食べさせたいというので砂糖を大きな缶に
入れて米軍の飛行機が空から投げおろす。そう
すると、缶がこわれて出た白いものを街の人々
が指につけてなめて「ああ、これが何年ぶりか
の砂糖だ」と喜ぶ始末。そういう時代に、皆さ
ん方は誕生なすつたわけである。

その頃にくらべたら、今くらい平和な、のん
きな時代はないと考えるのが普通かも知れま
せん。しかし私どもがほんのひと月をふりかえ
つてみましても、世界にはいろんな動きがあり
ます。フルシチョフが失脚した。一体これから
のソ連はどうなっていくのだろう。共産主義の
政治体制は変貌せずについてゆくものである
うか。私どもの学生時代にソヴェット人民共和
国というものができたのですが、理念として理
解された共産主義はあったが、現実に国家の政
治体制になったことに私ども驚愕したもので
した。半世紀近くたつてこれからソ連はいかに

外交・内政を展開していくだろうか。イギリス
では労働党が天下をとったが、労働党がはたし
て現実に独自の政策を実施できるだろうか。中
共の核爆発は予想しておったことだけでも、一
体中共の真意はどこにあるのか。いろんな問題
が目の前にひかえています。国内では池田内閣
が退陣して佐藤内閣ができました。日本の経済
はたしかにのびてきております。一例を建設業
に見ましても、世界で受注高の順序で見ますと、
第一位から第三位までが鹿島、清水建設、大成
こういう順序になります。ただここで考えてい
かなきゃいけないことは、日本の建設業者は世
界一の受注高をもっているが、しかしながらそ
の受注の大部分は国内でとつておる。ところが
外国の土建会社は、外国の運河を開発する。外
へ外へと仕事をしておる。日本では大会社が中
小企業を圧迫して国内の仕事で太つてゆく。こ
の現状はまだまだ本物じゃない。もつと根本に
は国防費がすくないから経済が順調なのだが、
日本の国の自衛を今のままにしておいてよい
ものだろうか。率直にいつて、一九七〇年の安

全保障条約のつぎの改定期をどのような考えで迎えるべきだろうか。そのときは諸君は社会人として対処しなければならない。今は仮に無事な時代だとしても、やがて諸君を待つてるのは決して楽な時代ではありません。やがて諸君を待つてる時代には、どうしても諸君自身の判断でやっていただかなきゃならないのであります。

ここで私は皆さんの参考にもと、私自身が経験した学生時代をふりかえってみたいと思います。私自身の学生時代は、たしかに激しい時代でした。私が旧制の高等学校に入る前に総理大臣の原敬さんが殺された。私が大学を卒業したすぐあとに浜口総理大臣が狙撃された。共産党が非法法の状態の中で秘密結社をこしらえた。そしてほんとに徹底した断圧を受け根こそぎ検挙された。かくして治安維持法ができて、また一方、普通選挙法ができた。関東大震災の大混乱もあった。外はどうだったろう。支那大陸では、日本の軍隊が鉄道に爆薬をかけて、張作霖を爆死させた。日本の大陸進出が始まった。ソ連にははじめて人民共和国ができた。イタリアではどうだろう。ファシストがローマに進軍を開始した。そしてファシストの土台を固いものにした。内にも外にも嵐の時代であります。その時代を私どもは経験して参り、そしてやがて日本が嵐のなかで戦争に負ける運命をたど

る。

私がこうやって回顧していることは、戦争に負けてこの二十年、日本人はあんまりのんきに過ぎてきてしまった。諸君は今和敬塾という一つの城郭の中にこもって下すつたらよろしい。しかしながらこのつぎの時代というものは、あなた方がのりきっていただかなきゃならない。原潜寄港反対で頭を割られたりする学生諸君のような青春の浪費はやめて、もっと大事なことをお考え願わなさい。

まず、自分の国の安全をどうやって守っていくかということでありませう。戦争の終わりました直後によく申しましたように、スイスのような中立国になるか否か。スイスの中立の模様はいろんな機会にお聞きになりましたでしょう。私自身もいつてみまして、ほんとに山深い小屋で、大きい鐘を首にぶら下げた牛のむれがカランカランといい音をたてて歩いているあたりで、それぞれの山小屋の中には、みんなピカピカに光った鉄砲と実弾をもつて民兵がいる。そして民兵は常に訓練をつづけている。中立というものを守っていくためには、国も多くの軍事費を支出し国民も皆兵の体勢でこれを維持している。中立がよいか集団安全保障体制がよいか。諸君にお願いしたいことは、世界の平和、日本の安全を維持するためには今後世界連邦のような考え方もできましようが、よほ

ど真剣な決意をもって対処していかなければならないことでもあります。

次には、アジアの問題ということに関心を持ち、アジアの問題は日本人が解決するという熱意であります。現に佐藤さんが総理大臣になって初めにいつておりますように、現実にはレッドチャイナ、台湾という二つの中国がある。ソ連とアメリカがそれぞれの考えで発言して来ましようが、中共の問題、台湾の問題は日本の問題だ。アジアをどうするかという問題は、日本人が解決していかなければならない。自由国家のために、あるいは世界全体のために、アジアをどうするかということは、日本人がとりあげていかなければならない。日本人がアジアの問題を回避したならば、世界の平和というものも来るときがない。こうした問題を皆さん方は現にかかえておられる。青年である皆さん方に期待することは、これは私が大臣をやっております当時の自治庁、今の自治省で新しく採用する青年諸君にいった言葉ですが、同じことを諸君に期待したい。それは「諸君の目の前にある地平線には、或る人がいったように、一面にどこにもかげのないバラ色の地平線が展開している。就職がどうであろうとか、どういう月給をとって、どういう細君をもって、どういう家に住むか。それも問題ではあるけれど、すべてはバラ色の一色ですよ。明るい態度ですべてに

対していくことを青年の特権と考えてほしいのです。老境にはいつてゆく私にはそうではなく、明るい地平線のどっかに灰色のなにかがみえる。それは死ということ、真剣に死ということを考えなければならぬ時期にきている。老人は老人らしく、青年は青年らしく生きるべきだ。青年はどんな難局にも明るい態度でのぞめ。それが青年なのだ。そういうことをいったのでありますが、青年の時には青年らしく、壮年にはそれだけの生き方をすることを貴方がたに期待したいのであります。

こういうことをいいながら、私はもう一つ思い出したことがあります。それは今から三十五年前、私が内務省に就職したとき、当時の内務大臣が望月圭介さんで、こういう訓示を私どもにしました。「きよう採用した学生諸君は、見渡したところどれもすっかりしてる。だから諸君のなかで酒や女でしくじるのは一人もなからう。酒や女でしくじるものをおれは採用してない。ただ一つだけ諸君にはなむけすることは、社会に出てみると」とポケットから口つきたばこの敷島を二本出しまして、「これが君だ。これが君の友人だ。そうすると、今後何十年か内務省で働く間にこれが君であって、友人よりはるかに、あらゆる点で優秀な人間だ。ところが何かのときに君より劣ってる人間が、一歩先んじるときがあるかもしれぬ。その時に、おれ

は友だちよりもすぐれた人間だ、だからおれには必ず次にチャンスがある。ところが自分より劣ってる自分の友人にはチャンスがないかもしれぬ。自分よりだれがみても劣ってる人間が自分より先に出世をした。これは喜ばしいことだ、と腹の底からそう友だちを祝福し得る人間になれ。そうなつてはじめて人生の長い馳場では君がまた一段豊かな心をもつたものになるだろう。こういうことをいったのであります。この望月さんのことばをあわせて諸君に味わっていただきたいのであります。

話を少しかえましょう。政治家である私、参議院議員である私は、一昨年の七月一日に最近の選挙をいたしたのでありますが、実は選挙運動が終わりました六月三十日の晩、何ともいえない空虚感におそわれました。自分の行動に何の意味があるだろうか。政治家として選挙運動を通じてどれだけ政治に貢献できたであろうか。これが私の反省であります。諸君にも、自分がやってる学問が何の意味があるだろうか。社会に出て、会社でお働きになる。官庁でお働きになる。工場でお働きになる。一体何の意味があつてやってるのか。例えようのない空虚感におそわれる時が諸君にもあると思います。諸君も自分のそばに常におく書物を持つておられるかと思いますが、私もここに『眠られぬ夜のために』の第一巻と第二巻を自分の枕頭の書と

しております。従いまして選挙のときもヒルテイーの二冊はもつて歩いておつたのであります。が、たまたまその第二巻の六月三十日のところを久し振りに自分の家に夜おそく帰りまして開いてみましたところ、こういう言葉にぶつかりました。もつと長いことが書いてありますが、「あなたは政治をすつかりあきらめてしまふべきであろうか。決してそうではない。あなたはあなたの国を助けて、支えなければならぬ。国家はまさにそれが必要なのだ」。私は自分のわずかな乏しい力もやつぱり今の国というものに献げなければならぬ。だれかが国を助けて、国を支えなければならぬ。諸君も現実の政治に失望してもやつぱり、国を支える、国を助けるということ、そして永遠に続くべき民族のために貢献する情熱を持つてこれからの人生を歩んでもらいたいのであります。私は政治家として事新しい激励を、はつと気が付くような激励をヒルテイーから受けたのであります。諸君は何かしらん、若い時期に一生を通じて、ことに臨んでは開く価値のある書物というのをおもちになることは意味のあることじやあるまいか。考えていただきたいのであります。

また私の学生時分を回顧してみましよう。諸君と同じような年頃、旧制の高等学校、今の教養課程のときでございましょう。法学通論を田

中耕太郎先生、今ハーグにいつてらつしやる田中さん。御承知の通り商法の権威、もつとも自然法的な意味合いの少ない商法の専門家の田中耕太郎さん、この方が講義の途中で態度を改めてこういうことをいい出された時がありま
す。「さらば汝らの天の父の全きごとく全かれ」。これはマタイ伝五章の一番末尾の言葉であります、聞いてる連中はあせんとした。「さらば汝らの天の父の全きごとく全かれ」。教会で牧師さんがいうならともかく、法学通論で商法の教師が、だから君たちは、天の父が神様が完全であるくらい完全性を追究しろ、ということ
をいったのであります。皆さんもマタイ伝五章の末尾のところは御存じかもしれませんが、「さらば汝らの天の父の全きごとく全かれ」の前に二節ばかり短い言葉がついておるところ
を読みますと、「汝らおのれを愛するものを愛すとも何のむくいをか受くべき、収税人もし
かするにあらずや」。みつき取りもそうするんじやないか。「兄弟にのみ挨拶すとも何のまさることか、異邦人もし
かするにあらずや」。今の時世というのはあんまり小成に安んずる者の多い時代じやな
かるうか。おまえたちはクリスチャンだ。信仰を持つというけれども、兄弟にだけ親切にするのはだ
れだつてやつてるじやないか。そうしたい意気込みというのが青年諸君にとつて大事じやないか。若いときから高い

ところを目ざしてほしい。さわやかな、先にも申した、ばら色の世界に生きる時代にももの根本にふれてほしい。皆さんの中にも短歌の好きな方がいらつしやるだろう。私も短歌は好きですが、ことしの歌で記憶にあるのは、一月一日の毎日新聞に川田順さんが、「まだ若き大統領はすがすがし海軍中尉としてほうむられたり」というのであります。ケネディという人が大統領として多くの功績をあげて不慮の死をとげた。すぐれたことをやりました。しかし彼が死んでいくときは、海軍中尉としてひとにぎりの土にもどつた。大統領としての偉さよりも国にいのちを献げること誓つた青年の時代、海軍中尉としての姿で葬られる。すがすがしさ、さわやかさにかうたれるのであります。

私が激動期における青年諸君に期待したいことは、青年のさわやかさ、すがすがしさを一生もちつづけていただきたいことでもあります。そこで諸君にお願いしたいことは、完全なものを目ざしていただきたい。ほんものになつていただきたい。大急ぎでしゃべつてみたり、大急ぎで原稿を書いている壮年期にはできない修業をしてほしい。語学でもよろしい、スポーツでもよろしい。ほんものになるといふのは、実はこの青年の時代に大事なんだ。だから原潜のデモで歩きまわるひまがあつたら、ほんものになる努力をしてほしいものであります。

ほんものになるということ、完全なものを期待するということが青年の特権であるということに引き続いて、諸君に考えてほしいことは、世の中の毀誉褒貶から無関係と申しますか、世の中でほめられたり、けなされたりすることから早く縁を切つてしまふ。ほめられても、けなされても感じないだけの人間になつていただきたい。それがほんものになる一つのポイントだと思ふ。これも、ヒルデーの『眠られぬ夜のために』の第二巻の一月十四日のところだと思ひますが、小さい見出しで、「人生に出ていく若い人たちのために」というのがあります。その中でこういうことをいっている。「あなたが完全に正しいものにならうとするなら、良い新聞などといわれるものは断念するほかはあ
るまい。日日の新聞は完全によいことをほめた
たえることはおよそめつたになく、逆にほとん
どつねに効果をあげそうな耳目をそばだたせ
るようにならうことをもてはやしている」と忠
告しております。新聞というのはおもしろいこ
とは書く、耳目を衝動することは書く。しかし
ほんとうのことはなかなか評価ほし
ないし、できな
ないような仕組みにできてる、とい
うのです。おもしろいことが書いてあるな
と思ひますのは、「新聞がキリストの時代にす
でにあつたら、新聞はもちろ
ん我々の主そのひとをほめたり、
弁護したりはしなかつたであらう」。こ
うい

ことが書いてあります。そして「新聞によつてたびたび、或はさかんにもはやされるような人物には信用をおかないことが、きわめてたしかかな人間知のひとつである。いわんや自分の生活を自己宣伝によつてきずいていようような人間は絶対に拒否すべきである」と断じるのです。

貴方がたが聖人のようになってくれる必要はないんですが、今からそうした世間の無責任な評価に血道をあげない人間におなりなさいということをおもひたいのであります。世の中の人にほめられたり、けなされたりすることは、二の次、三の次だという人間におなりなさい。

そうすると宗教というものについてお考えになる機会も生れてよいかと思います。私は家庭はキリスト教の家庭であります。ところが知久さんと一緒に入りました芝中学というのが浄土宗の学校。その学校に渡辺海旭というすばらしい校長さんがいた。ドイツ留学中、托鉢をつづけて勉強し、日本語はどもるが、ドイツ語は流暢な傑僧でした。私学にはまたかわつた先生がいます、近ごろ新聞などにも書かれておるんですが、加藤貞斎という先生がおられて明治三十九年、一九〇六年から今日まで同じ中学の英語の教師をしている。教育者らしい教育者のいる浄土宗の学校に入ったのであります。家庭のキリスト教、学校の仏教、この二つの経

験をもつたわけですが、やはり私はキリスト教に固有する罪の意識について今も考えさせられることが多いのです。これは諸君が小説などを読まれるときに、ことに外国の小説を読み出すときに、キリスト教が土台になつてゐる国の小説を読みますと、しばしば深刻な罪の意識にふれられると思います。おまえは悪い。こう誰かにいわれるから、それではと考え直して直す。これは子供のもつ罪の意識でしょう。法律の規範がそうでしょうが、そこからもう一つ深い罪の意識というものが宗教にはあると思います。自分は悪いんだ、罪人だと考え、どうかしてこの罪を解脱したいと突き詰める、そして自然の力以上の力によつて脱却できる。諸君には自分で解決しなければならぬ、深刻な問題にとり組んで見る必要があるのではないだろうか。それなくしてはいわゆる文化も真の意味では理解できないんじゃないだろうか。

諸君に最後にのぞむことは、愛情の豊かな人間になつてほしいということです。一体愛と誠意、これがいかにして一致していくか、諸君が多くの機会に当面する問題だと思ひます。古典に属する小説でしばしば教えられるのは諸君も経験されるところだと思ひます。

諸君のこれからの一生の間に、生死のさかんに当面されることが一度や二度は必ずございましょう。このときに諸君は大いに飛躍をして

いく。これをあらかじめ覚悟していく。なまじつかなことで、これは大変だとうろたえることのない人間になつていただきたい。真の愛をもち、またこれを感じしうる人間であつて初めて可能なことでもあります。そのような意味合いで、私は私の尊敬する先輩、野村吉三郎さんがいかに生死の境をこえ、いかにひとの愛にうたれて一生をおえられたかをお話しておわりにしたいと思ひます。

私は先ほども申すように、参議院議員をしておりますが、同じ議員に最近亡くなりました野村吉三郎という海軍大将、独眼竜の大將がおられました。この大將がこういう話をされました。私がさつき申したと同じような意味ですが、「人間の覚悟というものは、あんがい若いときにできるもんですよ」といわれるのです。野村さんは上海事變のときに爆弾を投げられて負傷されたのですが、しかしその前、もつとずつと前に私は死んでるんですよ、という。日露戦争のときに、野村さんはまだ二十幾つで海軍大尉だったそうです。濟遠という軍艦で航海長でした。そして乃木さんが二〇三高地を攻めてるときに、旅順港でその援護の攻撃をした。濟遠が撃沈されて、一挙にして海の中に投げこまれてしまった。零下九度という寒いときで、艦長さんはすぐ凍えて死んでしまったそうです。野村さんが浮かび上がったときに、水兵が大

きいボートをこぎながら遠くに去ってゆく。野村吉三郎という人は大きい。縦も大きい、横は私の倍ある。ところが、航海長が浮いてるといつて戻って、航海長一人を乗せる余地のないところに無理に引っぱりあげて水兵が助けてくれた。水兵の愛で万死に一生を得た。自分はあるときに死んでた人間である。そしてそのときの感じは、兵隊はありがたいな。水兵とは可愛いな。そのときから自分の人生観というもののはつきりして参った。こういうことであります。あんがい諸君は早い時期に生死のさかいの経験をするかもしれない。それが諸君の一生を支配するかもしれない。油断はできないのであります。その野村さんがとにかく岸へついて、そうして東郷連合艦隊司令長官のところお知らせにいかなきやならんといつて、陸へ上がって騎兵大隊の陸軍にかけつけてみたら、南次郎という陸軍大尉がいた。東郷さんのところへかけつけるんだが馬を貸してくれといつたら貸してくれた。その南次郎はやがて同じ内閣で陸軍大臣、野村吉三郎は海軍大臣。南次郎は参謀次長で、野村吉三郎は軍令部次長となった。軍人の昔話を申すんではありませんが、あんがい二十代のときに生死のさかいをこえて、そして馬を借りてずぶぬれの体でかけつけた相手というのが相争う陸海軍でありながら、心を許しあつて国軍をささえる友達として終始した。

あんがい生死の問題というのは、繰り返して申すようですが、若い時期に起り、一生の親友も若い交友で決するものらしい。ケネディが、すがすがしく海軍中尉として葬られていったように、大事な時期は今の諸君の若い時期じゃないのだろうか。そのような意味合いで、充実した生活をおもちになりますように念じてやみません。

皆さんに非常に気持よくお話し合いができました因縁を感謝いたしまして、私の話を終わります。

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。